

蒼と紅〔2〕

麦（穀物P）

目次

登場人物	4
第四章	はじめての併走	8
第五章	天高くウマ娘とトレーナー肥ゆる秋	42
間章	休憩所にて	72

登場人物

主人公・蒼 ヴイルシーナ

三姉妹の長女。みんなのお姉ちゃん。最近はジェンテイルドンナのことが三人目の妹に見える時も出てきた。妹達の方と一緒にお菓子を作ってプレゼントしようかと考えている。

主人公・紅 ジェンテイルドンナ

剛毅なる妹。ヴィルシーナの手作りの料理やお菓子を食べるためならば、どのような体重調整でも成功させようと密かに思っているけれど、今のところその機会はない。

次女 シュヴァルグラン

トレセン学園受験に向けて準備中（二人目）。姉さんに今までの人より親密そうな友人ができて嬉しい。ちなみに模試の成績が良かったら肉まんをプラス一個。体力テスト対策のトレーニングのおかげで体重のバランスは取れている。

三女 ヴィブロス

トレセン学園受験に向けて準備中（二人目）。お姉ちゃんとジェンティルドーナのラヴを見抜き、いち早くくつつけようと画策している。……ハッ！ 二人がいる場で手作りお菓子をおねだりして一緒に作らせたらいんじゃないかな？ 食べきれない分はシュヴァちにあげよう！

トレーナー・蒼 都築楓（つづきかえで）

ヴィルシーナのトレーナー。名前が紅つぽい。藍の後輩。実はお嬢様らしい。ケーキを一ホール丸ごと食べるなら胃腸が元気な今のうちかとも思っている。

下僕（トレーナー）・紅 鹿島藍（かしまあい）

ジェンティルドンナの下僕。名前が蒼っぽい。楓の先輩。学園のお嬢様達がまぶしい。なんやねんあの写真を見てるだけでおながいっぽいになりそうな高級料理の山は。

相談所長（トレーナー） 白江亮（しろえりょう）

ゴールドシップが所属するチームのトレーナー。ゴールドシップの差し金で学園のなんでも相談所的なことをやらされている。最近同僚とうどん論争を繰り広げた結果、理事長の思いつきで生徒も巻き込んで全国うどんフェアをすることになり、その実行委員長の仕事も押しつけられた。

ゴールドシップ ゴールドシップ

ゴールドシップ。ジェンティルドンナへのお詫びとしてどて煮を献呈した。

第四章 はじめての併走

ヴィルシーナさんとの初めての併走トレーニングの約束を取りつけた翌日、定例ミーティングで担当の鹿島トレーナーにそのことを伝えた。

「今度、ヴィルシーナさんと併走トレーニングをすることに決めましたわ。再来週末の十月二日の十六時から」

「はいよー」

この流れならさりと流しつつねじ込め――

「……つて、こら待てい！」

――なかつた。

「いかなさいまして？」

「『いかながなさいまして?』じゃない! トレーニングには計画があるの! だいたい先方だつて——」

「あちらの都築トレーナーからは先ほどご快諾いただけましたわ」

「本当??」

「疑われるならば、ご自身で確認されたらいかがかしら?」

そう言うと、鹿島トレーナーは苦虫を嘯み潰したような顔で電話をし始めた。

「あーもしもし楓、今大丈夫? お宅のヴィルシーナさんにうちのジェンテイルが併走トレーニングを申し込んだつて聞いたんだけど。……うん。うん。わかった。ごめんね」

電話は短時間で終わり、それからトレーナーは私の方を睨みつけ、こちらを指差して叫んだ。

「ジェンテイルの要求を聞いたんじゃないやなくて後輩の頼みを聞いて認めただけだからね!」

「いずれにせよ、私の要望を通していただけたので感謝の念は変わりませんわ」

頭を下げつつ、これからもどうしても要望を通したい時はヴィルシーナさんスト……コホン、ヴィルシーナさんを見守る会の同志メンバーである都築トレーナーにも並行して話を通して先回りしておこうと決めた。

それからは併走トレーニングの日が楽しみで、待ち遠しくて仕方なかった。

「ジェンテイルさん、今日も嬉しそうですね」

「あら、また出てしまっていましたか」

「ええ！ 尻尾と耳がいつもより楽しげに揺れていましたし、鼻唄も唄っていらつしやつたので！」

今週に入って何度めかになる同室のブエナビスタさんからの指摘に赤面した。もしかして、その無意識の動きが学園生活でも出てしまっていないだろうか。

「つかぬことをお伺いしますが、学園の中でのも同じような振る舞いになってしまっていたりはしないかしら？」

「その点は大丈夫だと思います。学園内でお見かけした時はいつもの凛々しいイメージでした」

「ありがとうございます。安心いたしましたわ」

とはいえ、気を抜いていると表でも動きに出てしまいかねない。正しく律する必要がある。あった。

翌週の半ば、一通りの基礎トレーニングとインターバル走を行い、最後に芝コースで一六〇〇メートルの実戦さながらの全力走行を初めて行った。全力走行の計画にトレーナーは難色を示したけれど、トレーナーの手元にあった私の骨格・筋力の解析資料を指差して黙らせた。

「このスコアなら一本であれば走っても問題ないのではなくて？」

「うーむ……現時点で少しでも違和感があったりはしない？」

「もちろん」

「……わかった。一本だけね」

「ご理解頂きありがとうございます」

トレーナーの駆け声でスタートし、イメージを再現しつつコースを周回してゴールラインに設定したトレーナーの前を駆け抜けた。

「……はいっ、おお！ 相変わらずすごいなあ」

「いかが？」

「来年どこから来週末の秋華賞しゅうかしょうに殴り込み掛けたいくらい。いや本当すごい」
「当然ですよ」

これは根拠なき主張ではない。ここまで積み上げてきたトレーニングの成果が十二分に発揮できている、そう自己評価できる結果が出せていた。

十代くらいの時期におけるウマ娘の走行能力のピークは年齢とあまり関連しておらず、『本格化』をいつ迎えたかによって変わる。そのため、私と同じ高等部生でもまだ本格化を迎えておらず、中等部生よりタイムが遅い生徒は多い。もつとも、私の場合には本格化が始まっていたのに邪よこしまな事情でデビュー時期を意図的に大幅に遅らせた手前、これで走れないようではむしろ問題だった。その点はトレーナーも承知していて、ニヤニヤ笑顔を浮かべてこちらを見た。

「ま、ジェンテイルは例の蒼アイルシーナちゃんのお嬢様と一緒にデビューしたいんだもんねー」

私が無言で目を逸そらしたのを見たトレーナーが、人様の恋愛事情を探ろうとするお節介オバサ……いえ、お節介お姉さんの顔になつてこちらに近付き、耳に向けて囁ささいてきた。

「あの子と随分仲良くなつたじゃないの。デートでもした？」

このトレーナー、どこまで知っているのか。ひとまず平静を装って返事をした。

「いいえ。デートと呼べそうなことは特にいたしておりません。ただ、来週併走をする予定もありますし、カフェテリアでお会いした折に少々ご挨拶をした程度ですわ」

「またまた」

トレーナーの口調からは、納得していないという感情ではなく、把握済みのことを隠そうとしている姿を揶揄^{からか}うような心が感じられた。

「どこまでご存知でいらつしやるのかしら」

「そだねー。さる情報筋によれば、ちみつちやくなつたヴィルシーナちゃんをホテルに連れ込んでお世話しようとしたら、謎のアクシデントで鼻血吹いちゃったって聞いたんだけどほんと？」

どこまでも具体的で、しかも間違いがどこにもない正確すぎる情報だった。ここまでの情報をトレーナーに渡せる候補は二名だけ、そして実際にやりそうなのは一名しかいなかった。すべてバレていそうだけれど、まだ切り抜ける余地はあるはずだと思つて話を続けた。

「ウマ娘もヒトも、いきなり小さくなるなどあり得ないのではないかしら」

「そうね。普通ならそう思うわ」

トレーナーはそこで一旦言葉を切り、近くに置いてあったファイルから小さな紙切れらしきものを取り出してこちらに示した。

「でもこんな写真見せられちゃねえ」

トレーナーが差し出した写真を受け取った。そこには小さくなったヴィルシーナさんと一緒に学園内を移動している私が写っていた。紛れもない本物^{本物}だった。しかしまだシラを切る余裕は十分にある。

「最近は何物と見分けがつかないフェイク画像も気軽に作れるような時代ですわ」

「フェイクだと思うじゃん？ それチエキ。わかる？ インスタントカメラってやつでね」

そこからしばらくはインスタントカメラなるものの説明とトレーナーの昔語りが続いた。この写真はシャッターボタンを押してフィルムに像が結ばれると、その場で現像されて写真になるらしかった。確かにそれだとフェイク画像を作りようがない。

ちなみにトレーナーは昔から快活だったというわけではなく、高校時代はどちらかと言えば大人しめで、でもインスタントカメラというもので写真を撮り合うくらいには友人知人との交流があったらしい。

「いやあ、これ受け取った時に聞いたんだー。チェキの新しい機種が今でも開発されて今度出るって。私の青春を飾ったチェキが現役だって知って嬉しくなっちゃったなあ」

「そうでしたの。しかしチェキ？ をお持ちの方が身近にいらつしやったとは」

「うん、意外だった。なんでゴールドシツ……あつやべつ」

やはり白いアンゴールドシツプさんのせいだったらしい。

「げしゅにん下手人の名を供述頂き感謝いたしますわ。本来でしたら直径三センチの球体にするつもりでしたが、無罪放免として御礼にハグをして差し上げたく存じます。感謝の意を込めて少々強めに」

「ちよつと待つてそれ私絞めころ」

『御礼のハグ』をしたところ、トレーナーは一瞬で静かになったので、彼女をそつとコース外の土手のあたりに横たえた。完全に気絶しているが三十分もすれば目覚めるだろう。ひとまずはクールダウンをしつつ次の行動を思案した。

☆ ☆ ☆

三十分後に目を覚ましたトレーナーに説教をし、証拠物件として写真を押収した。写真確かめている時に『ジェンテイルが慈愛の笑顔と下心満載の笑顔を交互に浮かべてる……』と述べたトレーナーにデコピンを与え、次はゴールドシップさんが根城にしている例のチームトレーナー室に向かった。

「失礼いたします」

「おや、ジェンテイルドンナさん」

今日は扉の横に「チーム『アクアマリン』』という風流な名前が掲げられている部屋の中には、この主・白江トレーナーと、チームメンバーらしき方の二名だけがいる。メンコの色が赤と緑、さながらポインセチアのような彩りいろどだった。

「ゴールドシップさんがどちらにいらっしゃるかご存じでしょうか？」

質問にはポインセチアナ色の方が答えてくれた。

「あー、ゴルシならさつき出て行きましたよ。何やら『なんだかよく分かんねーけど猛烈に悪い予感がしてきたからちよつと遠洋漁業に参加してくるぜ！ じゃ、よいお年

を！』って」

さらに白江トレーナーからの補足もあった。

「本気で行く装備はしていなかったの、おそらく菜園管理事務所のあたりに隠れているかと」

「情報提供、ありがたく存じます」

果たして、下手人は菜園管理事務所の一室で昼寝をしていた。

「ゴールドシップさん」

「あー？ ゴルシ様は今日は休業うおわっ！」

「なぜ私がここに来たか、お分かりですわね？」

先ほどの写真を示した瞬間、彼女が逃走しかけたので拘束した。

「放せ！ アタシは無実だ！」

「虚言は重大な結果を招きましてよ」

「本当だって！ アタシはカメラを貸しただけだ！ 本当に撮ったのはヴィルシーナのトレーナーだって！」

表情からして、彼女は嘘はついていないようだった。真犯人が『同志』・都築トレーナーだと明らかになった。まさかの同志が主犯で、しかもヴィルシーナさんの身に起きた一件を彼女相手には慎重に秘匿していたのに、最初から全て明らかになっていたとは思わなかった。

「情報提供には感謝いたしますが、身内を売るのは悪の道に悖る行いですわね」

「オメーのトレーナーがゲロつちまったなら取引は全部不成立だ！ だからタダで耳より情報をくれてやる！ その時の写真はもつとあのトレーナーの部屋にあるぞ」

「……感謝いたします」

ゴルドシップさんにも「御礼のハグ」をし、菜園管理事務所の皆様にお詫びをしつつ、そのまま引きずって保健室に連れて行って養護教諭に託した。それから都築トレーナーの部屋を訪問して追加取引を成立させた。報酬は後ではずんでおきたい。

押収した写真に加え、新たに入手した写真を内ポケットに丁寧に隠し、カフェテリアに来たところでヴィルシーナさんに遭遇した。

「こんにちは、ジェンテイルさん」

「ご機嫌よう、ヴィルシーナさん」

いつも通りの態度を装うことはできたと思う。そう、他の方の前と変わらない落ち着いた振る舞い、あるいはビジネスの場で相手に隙を見せない姿勢――

「来週の併走、とても楽しみです」

「ッ！」

ヴィルシーナさんの透き通るような高めの声、そして微笑みに、すべての心構えが砕け散って無に帰した。口元が緩んでしまうのをこらえて、なんとか返事をした。

「ええ。楽しみにしていますわ」

「よろしくお願いします。あの、実は先ほどのトラックでのトレーニングの様子を見たいました」

「あら、そうでしたの」

「はい。ありきたりな言葉にはなっていますが、とても力強くて、速くて、なんだかもう明日にでも本番のレースで走れてしまいそうで、すごいな、と」

「お褒めの言葉、ありがたく存じます」

そこでふと思いついた。もしかして『その先』を見られたり、聞かれたりしてはいない

かと。何とかそれとなく気取られないように探る方法はないか。……あった。

「参考までに伺いたいのですが、私が走った後のクールダウンの時に、何か気付いた点は無かったかしら。姿勢のふらつきや歩様の狂いなど、第三者の視点で観ると明らかになる物事も多いと思われますので」

「なるほど……申し訳ありません。ちょうどジエンテイルさんがゴールしたあたりで友人から呼ばれてその場を離れてしまったので」

「いえ。お気になさらず」

良かった。あのトレーナーとの話やその後のバイオレンス(?)な光景は無事目撃されずに済んでいたらしい。これからはヴィルシーナさんが通りかかる心配のない場所で制裁をしようと誓った。

ヴィルシーナさんが御友人に呼ばれたのでここで別れ、この後の時間をどう過ごすかを考えた。トレーニングの領域を大幅に超えた実戦さながらの全力で走ったことを理由として、トレーナーからは脚部筋肉トレーニングの禁止を申し渡されている。

『今日は風呂でぐでつとした後に布団でおねんねしてな! つてのが本音なんだけど、それだと貴方は勝手に何かしそうだから、とりあえず脚だけは禁止。後は自分の筋肉に聞い

てね〜』

ここぞというところで見通す力が鋭いのは、さすがはトレーナーと言ったところだろうか。したり顔で頷いて自画自賛していたあたりは少し癪だと思ふものの、異なる視座を持つ師の重要性を改めて感じた。ここは教えに従い、上半身トレーニングにとどめたい。

精神を統一して軽いトレーニングを行い、脚のあたりを念入りにマッサージュして今日の活動を終えた。

☆ ☆ ☆

そして迎えた併走の日。気分が高揚しているのを感じつつグラウンドに早めに来てストレッチをしていると、賑やかな一団がこちらに向かってきた。

「おー、ジェンテイル気合入ってんねー」

「ジェンテイルさん、本日はよろしくお願いたします」

鹿島トレーナーがヒラヒラと手を振り、その後ろにヴィルシーナさんと都築トレーナーがいた。そしてその後ろにさらに二名。

「こんにちは。よろしくお願ひします……」

「お姉さんこんにちは！」

「あら、シュヴァルグランさんとヴィブロスさんもいらつしやったんですね」

二人の名前を呼んだところ、三姉妹が揃って首をかしげた。

「およよ？ お姉さんどうして私達の名前知ってるの？ お姉ちゃんから聞いたの？ それとも私達もう超有名セレブになっちゃった？」

「きちんと会うのは、はじめまして、でしたよね……？」

「今まで妹達の名前は話したことは無かったような気がするのですが……話しましたっけ？」

まずい。そう言えばヴィルシーナさんとの（まだ数えるほどしかない）会話の時に妹さん方の名前が出てきたことはなかった。諸々の『観察』の成果として名前を知るに至っているの、その経緯が明るみになるとそのまま私ほか数名の悪行も自動的にバレてしまう。なんとしても切り抜けなければ。

「……私の記憶によれば、先週あたりの話で、確か一回だけヴィルシーナさんが妹さん方の名前を話されたかと」

「先週……よく覚えていませんが、もしかしたらそうかもしれません」

「ジェンティルドーナさんすごい！ 記憶力最強！」

「うふふ。記憶力は他の方に負けないと自負しております。あと『ジェンティル』と略していただいても結構ですわ」

「はい、ジェンティルさん！」

記憶力があるという事実を示しつつ、記憶している事柄をごまかしてその場を凌いだ。

「ところで、妹さん方は学園の見学にいらしたのかしら？」

「はい……月に一回こちらに来てはいるんですが、今月は姉さんから『とても強い、憧れの先輩と併走することになったからこの日に来たらいいと思う』って言われまして」

「ちよつシュヴァル！ そこまで詳しく言わなくていいから!!」

「うんうん！ 最近のお姉ちゃん、わたし達との話の中で必ずジェンティルさんのことすごいって話してくれるの！ でもなんでか今まで名前を教えてくれなかつたんだよね……

……チラッ」

「ヴァイブロス!」

「そこまで言って頂けるのは光栄ですわ。ご期待を超える走りをご覧に入れて差し上げます」

予想以上の評価をされていたらしく、口元がますます弛みそうになるのを抑えるのが大変だった。私の方の事情をすべて知っているトレーナー二名が揃ってニヤニヤしているのも今なら許そう。その評価に恥じぬよう、全力をもってお相手したい。

「コースは芝一六〇〇、ウォーミングアップで軽く一周、二本目が本番。OK?」

「はい!」

「承りました」

私達の併走の話がいつの間にかトレーナー達の間で広がっていたのか、デビューまであと一年はありそうな生徒の併走には見学に来ているトレーナーの数が多かった。一方で見学している生徒の姿はほとんどなく、なぜかもう安らかな笑顔で昇天しかけているアグネスデジタルさんと、その付き添いらしき子一名のほか数名いるだけだった。

ヴァイルシーナさんと並んでストレッチをした後、まずはウォーミングアップとして軽い

ジョグを一周こなし、それから一六〇〇メートルのスタート位置に移動した。

『二人とも、準備はいい？』

「大丈夫です」

「よろしくてよ」

スピーカー越しにトレーナーの声が響いた。スターターはスタンドで倒れ伏していたアグネスデジタルさんとその付き添いの子にお願いした。付き添いの子は先日あのチームトレーナー室で出会ったポインセチアな色合いのメンコを着けた子だった。

「ども。またお会いしましたねー。ナイスネイチャって言います」

「僭越せんえつながらおとおおお二方のレースのスターターを務めさせていただきます
ひゅ！ また囁んだ……」

「デジたんせんせ、取り乱すのはご両名を送り出してからにしてね」

アグネスデジタルさんは一緒にヴィルシーナさんをストーリー観察していた時よりも
気絶する頻度が増えている気しかなければ、この先無事に学園生活を送れるのだから
うか。

「旗とアラーム合図でのスタートになります！ ジェンティルさんとヴィルシーナさん！

改めまして準備はよろしいでしょうか!？」

アグネスデジタルさんに向けて軽く頷いた。それを見てそのまま砂になって消滅しそうになった彼女をナイスネイチャさんが正気に返らせた。

「位置について! 用意……」

旗が動くのを目の端で捉え、スタートを切った。

ヴィルシーナさんが前の方に動き、私はやや後ろに陣取った。まだ中等部生ながら実力の伸びは事前情報通りで、速度もパワーも随一だった。一六〇〇メートルは実際のレースだと一分三十秒台前半で決着がつく。練習だからといって力を抜くことはない。ここまでにトレーナーとともにヴィルシーナさんの練習風景を偵察して得ていた走りの通りなら、そこから彼女が力を増しても二バ身差をつけてゴールできる見通しだった。

四コーナーカーブからスパートを掛け、ヴィルシーナさんを追い抜き、引き離しにかかった。しかし。

「……ッ! まだまだッ!」

彼女の振り絞るような声が耳に届き、彼女との距離が縮まった。

「! フッ!」

こちらもさらに一息、先日の全力を上回る力を出そうと試みた。私の身体は無事に応えてくれたものの、これ以上の余力は無い。ヴィルシーナさんとの差をほとんど開くことができないままゴールラインに飛び込んだ。

速度を落として止まり、振り返ったところで、よろよろとしながら止まったヴィルシーナさんがコースに倒れ込んだのが見えた。

「ヴィルシーナさん!？」

「ヴィルシーナ!」

「お姉ちゃん!？」

遠くゴールラインにいたトレーナー達の方からも叫び声が聞こえ、スタート地点から戻ってきたアグネスデジタルさんとナイスネイチャさんを含めて全員ヴィルシーナさんのもとに駆け寄った。

「ヴィルシーナさん! 大丈夫ですか!？」

「あ……すみませんジェンテイルさん……急にエネルギーが切れてしまいました……」

「ヴィルシーナ、これ!」

都築トレーナーがブドウ糖のかけらをいくつか食べさせ、さらにスポーツドリンクを飲ませた。

「一時的な低血糖ね。ハンガーノックつてやつ。ひとまずトラック外に移動しましよ
うか」

「では私はヴィルシーナさんを」

ヴィルシーナさんをさつと抱き上げた。抱き上げて少ししてからヴィルシーナさんの諸々を至近距離で感じて感情がふらつきかけたものの、鋼の意志で抑え込んだ。

自分が抱っこされていることに気付いたヴィルシーナさんが、身をよじって抜け出そうとした。

「あの、自分で歩けますから……」

「倒れたばかりの方を歩かせるわけにはまいりません」

「汗もかいてて体操服がびしょ濡れですし……」

「お互い様ですよ」

もぞもぞと抵抗を受けて衣擦れするくすぐったさに耐えつつ、少し強めにホールドして落ちないようにしてからスタンドの下あたりのスペースに移動し、彼女の身体を横たえ、

膝を貸した。

「姉さん、大丈夫……?」

「ええ、もう大丈夫よシュヴァル」

「良かった……」

「お姉ちゃん止まったあといきなり崩れ落ちるんだもん！ びつくりしたよ」

「心配させてごめんなさいヴィブロス。情けない姿を見せてしまったわね……」

身体を起こしたものの、またふらつきかけたヴィルシーナさんを背後から支えた。私に比べれば華奢な体つきで、本格化の時期が近いとはいえ筋肉量には圧倒的な差があるはずなのに、先ほどのレースでは差をつけることができなかつた。この身体のどこからそれほどスピードとパワーが出ているのだろうか。

「ヴィルシーナはこの後きつちりエネルギーを補給して、一応メディカルチェックね。今まで以上の負荷がかかっているはずだから脚部は念入りにしないとね」

「はい」

「ジェンテイルもね。前回のトレーニングより少し強いぐらいの強度だと思うけど、ヘンなダメージがあると次にかかわるから」

「ええ」

私のトレーナーが『前回のトレーニングより少し強いくらい』と発言した瞬間、ヴィルシーナさんの表情が曇ったのを見逃さなかった。きっと、自分が敵わなかった相手が、自分よりも消耗せずに走り抜けたことを気にしているに違いない。

でも、本来は私の方が不安になるべきかもしれない。我ながら尋常でないと評価できるほどの筋力と体力をもつて全力で相手をしたはずなのに、ヴィルシーナさんを引き離せなかった。それは今後のレース生活が楽しみになるライバルを見つけ出せたという喜びの一方で、一時の油断もしてはならないことを再認識させられる出来事だった。

ヴィルシーナさん達と別れ、トレーナーと二人きりになったタイミングで先ほどの併走のことを尋ねた。

「タイムはいかほどで？」

「一分三十八秒二。明日のメイクデビューに出る？ ついでに京都観光も」

「まだまだ精進せねばなりません。……ところでヴィルシーナさんとの着差は？」

少し沈黙があった。

「……半バ身差。タイムは同じ」

「そうですか」

やはり、ほとんど差は無かった。

「今後、あの子が必ず貴方のライバルとして立ち塞がる。体力も必ず伸びるだろうし、何より、レースはたった一回でもハナ差先んじれば勝ちになるから、一層油断できない存在かな」

「意見が一致しているようで何よりですわ」

「ま、我々がやることは変わらないから。後は——」

そこでトレーナーは言葉を切り、私の方を眺めてニヤリと笑った。

「ジェンテイルがさつきみたいにヴィルシーナさんに鼻の下を伸ばして気が散らないように——」

「ふんッ！」

トレーナーを静かにさせ、肩に担いでトレーナー室に戻った。リスクとして自覚していないわけではないけれど、面と向かって言われるととても恥ずかしかった。

☆ ☆ ☆

翌日の昼過ぎ、座学の授業の後に学園のカフェテリアに行くと、ヴィルシーナさんの姿が目にとまった。せっかくなのでそちらに近付き、声を掛けた。

「ご機嫌よう、ヴィルシーナさん。体調はいかが？」

「あ、ジェンテイルさん。昨日はすみませんでした。もう大丈夫です」

「それは重畳ちゆうじやう。……ご一緒してもよろしいかしら」

「どうぞ」

ヴィルシーナさんの向かい側に座り、その姿をゆつくりと眺めた。自分に比べると小柄な身体から、自分に迫るほどの力を出してみせた秘密を観察して知りたい——という心持ちが、可愛らしい姿をとことん堪能したいという下心が九割だった。

「あの、私の顔に何かついてます？」

「……ええ、生クリームらしきものが少々」

自分の口元あたりに指を当てて示し、それを真似したヴィルシーナさんの指が小さく残ったクリームに触れた。彼女は頬を染めつつティッシュを取り出してそれを拭ぬぐった。

「失礼しました。もう他には何もついていませんよね？」

「そうですわね……他には見目麗みめうるわしい目と鼻と口がついております」

「みめうるわし……、っ！」

正直な感想を述べたところ、言葉を反芻はんすうしかけたヴィルシーナさんが固まり、顔全体を紅くしつつ小さくなった。そしてこちらを上目遣いで睨みつつ小さな声で抗議の言葉を述べた。

「突然ヘンなこと言わないでくださいっ！」

「本当のことですのに」

ふんすかしている彼女をこのまま見ているのも悪くないと思つたものの、このままだと可愛さ成分の過剰摂取で倒れてしまひそうだったので話を進めることにした。

「そう言えば本題がまだでした」

「何でしょう？」

「来週末の秋華賞ですが、現地観戦などいかがでしょうか？」

私の申し出にヴィルシーナさんは目を丸くして、くすくすと笑い始めた。

「奇遇ですね。私もジェンティルさんをお誘いしてみようと考えていたところでした」

「あら」

それなら話は早い。一緒に観戦する約束を取りつけ、新幹線の時間やホテルも決めた。トレーナーに話を伝えてから遠征支援委員会に手配を頼もう。

カフェテリアからトレーナー室がある棟に一緒に移動して、そのままそれぞれのトレーナーのところへ予定を知らせることにした。最初に私のトレーナーの部屋に行ったら、そこに都築トレーナーもいたので手間が省けた。

「あら、ヴィルシーナさんと一緒だったの？」

「そちらも都築トレーナーとご一緒だったとは。これなら話は一回で済みますわね」

「話？ もしかして結婚の報告？」

「ブフオツ!? ゲホツゲホー!」

私のトレーナーの発言に、都築トレーナーとヴィルシーナさんが吹き出し、そして咳き込んだ。私も吹き出しかけたのをこらえ、トレーナーのもとに歩み寄って右手でその頬を掴んだ。

「トレーナー？　しょうもない雑な話の振り方はやめてくださらない？」

「ひふれいひはひは」

『失礼しました』との反省の弁が聞こえたので解放し、顔を真っ赤にしたままいつも以上に離れてソファに座ったヴィルシーナさんの姿に若干の哀しみを覚えつつ、秋華賞観戦の予定を伝えた。

「二人とも行くんだつたら、私達も同じ日程で行くことにしたら費用を学園持ちにできるけどどう？　行動は四六時中一緒になくてもいいから」

「そうですか。予定に制約がかからないのでしたら制度はありがたく活用したく存じます」

「私も異存ありません」

ヴィルシーナさんも同意見だったので決定した。

「宿はリストの中から選ぶか、それ以外のところだと定額支給だった」

「自由を選べるのであればその点は問題ございません。良い場所を私が手配しますので」

「あいあい。たまには高級ホテルに泊まってみたいけど、いくら補助が出ても安月給が吹き飛んじゃうんだよねー」

「ご希望でしたら私の方で手配いたしますが」

私の提案は即座に否決された。

「いやいいつす。ジェンテイルお勧めのホテルとか旅館は超高級そうだし。肩こり通り越して石像になると思う。だいたい生徒本人が資産持ちだからって生徒にたかるのは私の美学が許さな—い」

「遠慮は無用ですが、そこまで仰るならばその意思を尊重したく存じます」

「よろしく。……あー、でも高級ホテルなあ」

「それなら私と先輩で出し合うのはどうでしょうか？　もし先輩が石像になったらちゃんとして帰って学園に飾りますから」

「楓も石像になっちまえ！　って言ってもちよつとやそつとの高級宿じや動じないもんなこのお嬢様！　後輩にたかるのはますます我が美学に反する！　というか先輩の威厳！」

私のトレーナーの雄叫びを、都築トレーナーは特に否定しなかった。振る舞いの端々に長年かけて身についたであろう細やかな心配りが見え隠れしているのには前々から気付いていたけれど、やはりそうした教えを受けるような暮らしだったか。細やかな所作を身につけたお嬢様が人をストー……コホン、熱心に追いかけて理事長秘書に説教される事態を

引き起こしている件についてはコメントを差し控えたい。流れ弾がこちらにも当たりかねない。

あと、都築トレーナーの『お金を出し合うのはどうか』という提案を、私のトレーナーは『後輩にたかるのはダメ』と断っていた。単なる先輩後輩、あるいは同じような給料を得ているトレーナーどうしの会話と少し違うような感じがあつた。

私のトレーナーがひとしきり吼ほえた後、少し間を置いて都築トレーナーがぼつりと語つた。

「先輩ほどのトレーナーだったら、たまにはそう言うホテルに泊まったつてバチは当たらないと思います。先輩つて、やつぱりすごいですから」

「どうした楓、今さらながら『この世の真実』に気付いちやつた？」

「茶化ちかさないでくださいよ。トレーナー養成学校を優秀な成績で卒業して、しかも奨学金を結構貰もらえたり、借りた奨学金を返すのを免除されるくらい優秀で、トレーナーになつてからまだ何年かでもう重賞を勝てる子を育ててるんですから」

都築トレーナーによる暴露に私のトレーナーは一瞬固まり、その後なんでもないふうを装つて手をひらひらと振つた。

「あれはね、あの子がすごかっただけ。才能を花開かせることができなかつた子も何人もいたし。ジェンテイルが来る前に担当していた子が活躍できなかつたのは完全に私の責任だった」

「過度な謙遜けんそんはよろしくなくてよ、鹿島トレーナー」

思わず口を挟んだところ、トレーナーはビクツと震えて固まった。

「重賞を勝たせることができたのは立派な功績ですし、他の子達も貴方の力添えがあつてこそ、本人の望む限りトウインクル・シリーズを走り抜くことができたのではなくて？」

「そう……だといいけどね」

「私が保証いたします。契約を取り交わした後で、トレーナーの経歴については学園にあつた記録から辿たどらせて頂きました。担当したウマ娘の持てる力を最大限に発揮させて活躍させたと評することができるとはわたくしはあつたわ。あと、前に担当されていた生徒さんにも話を伺いました。皆口を揃えて述べていらつしやいました。『鹿島トレーナーのもとで走る事ができて幸せだつた』、と」

「そつか……貴方もあの子達もずいぶん褒めてくれるじゃない」

「褒めているのではなく事実を述べたまででしてよ。そしてこれからご覧に入れますよ

う。私が多くの栄冠を手にし、トウインクル・シリーズの歴史を塗り替えるところを。そうですね……まずはティアアラ三冠から」

私の宣言に、隣からただちに異議申し立てがあつた。

「その願いは叶えるわけにはいきません。ティアアラ三冠は私が獲ります」

ヴィルシーナさんから純粹な闘志のオーラが沸き起こるのを感じた。先日の併走で感じた強い意思の片鱗へんりんは本物のようだった。やはり、彼女こそが私の最高のライバルになる。

横を向くと、こちらを見上げるヴィルシーナさんと目が合った。その射貫いぬくような視線を受けて、胸が高鳴るのを感じた。その高鳴りを笑みに変換して告げた。

「よろしくてよ。最高の強者を相手に闘って勝つことこそが真なる強者の証ですので、ヴィルシーナさんにはこの上なく強くなっていただかなければ」

「ええ。必ず」

ヴィルシーナさんと都築トレーナーが退室した後、トレーナーが何かに関心した表情をしつつこちらを見てきた。

「いやあ、シーナちゃん相手にちゃんとライバル演じられるんだねー」

「貴方は私のことを何だと思ってるのかしら？」

「シーナちゃん好き好き暴走特急ストーカー？」

「……事実無根と断じることができないのが非常にもどかしいのですが、この後何かに驚いて咄嗟とつさにトレーナーに抱きついた時に『力の加減を間違える』ことがあるやもしれません」

「で、テロには屈しないぞ！」

「ならば抱き潰されないよう骨格と筋肉を鍛えなさい。まずはこの鉄球を……きちんと手のひら全体で支えてくださいませ」

携たずさえていたバッグから鉄球を取り出し、注意事項を伝えつつ彼女の手の上に載せた。

「へえ……おグフォア!？」

そしてトレーナーはそのまま床に倒れ伏した。鉄球がゴトン、と音を立てて床に転がり、身体を起こしたトレーナーが猛抗議してきた。

「なんちゆうもん持たせとんじゃ！ 手のひらに穴が空くかと思つたわ！」

「これを軽々と持ち運びできるようになれば、私に圧縮される可能性が減るかと思存じます」

「肉体改造の道は長い……」
「精進あるのみ、ですわ」

第五章 天高くウマ娘とトレーナー肥ゆる秋

あつという間に一週間が過ぎ、京都へ遠征する週末になった。朝の自主トレーニングをする時間にいつも通り起きて支度をしていると、ちょうどブエナビスタさんが起きてきた。

「う〜くん、あ、ジエンティルさんおはようございます……」

いつもより心持ち眠そうで、口調のぼやぼやした感じが上乘せされていた。再来週の天賞（秋）出走を控えて日々強めのトレーニングを積んでいるそうなので、疲れが出ているのかもしれない。

「おはようございます。起こしてしまつたかしら」

「あ、いえ！ もともとこのくらいの時間に起きる予定でした！ お兄ちゃ、じゃなかつ

た、トレーナーさんと買い出しに出かける予定でしたから」

「そうなの。気をつけて行つてらっしゃい」

「はい！ ジェンテイルさんは秋華賞現地観戦でしたよね？」

「ええ。やはり再来年に必ず立つ地、そして勝利するレースは改めて観るのも悪くないと思ひまして」

「なるほど。秋華賞は私にとつては苦い思い出があります……つて、遠征前に言う話ではありませんよね！ ごめんなさい！」

一昨年の秋華賞では、ブエナビスタさんはライバルのレッドダイザイアさんと競り合ひ、七センチ差での二位『入線』となった。——『二着』ではなかった。最終コーナーでの走法が『斜行』とみなされ、さらに三位入線の子の走行を妨害したとの判定により、順位が入れ替えられる降着処分こうちやくしゅぶんの裁定が下されたのを実況中継で聞いた。

寮に帰ってきたブエナビスタさんはひどく意気消沈していた。彼女がぼつりぼつりと話してくれた内容は、自分への処分を嘆くものではなく、結果的に妨害してしまった子に対する贖罪しやくざいだったのを覚えている。

当時のことを思い出したのか、少し翳かげりが見えた表情に明るさを復活させるべく、言葉

を贈った。

「あの時にも述べましたが、真剣勝負のレースゆえ、極限においては思わぬ動きとなってしまうこともありますわ。全力を尽くした後の結果に真摯しんしに向き合い、謝罪し、立ち直ったからこそ、今もなお多くの方から讃えられる結果として表れているに違いありません」

「ありがとうございます！」

「ええ。しかし、それも間もなく移り変わりを迎えます。——再来年、トゥインクル・シリーズの話題を私一色に塗り替えることといたしましょう」

「おお……！ 前オルフェさんも似たようなことを私に向けて宣言されました。でも、私もまだまだ頑張ります！」

「よろしくてよ」

ブエナビスタさんのその言葉に、思わず笑みがこぼれた。意図的に力を込めて放った言葉を真つ直ぐ受け止めつつ、それでいて決して折れない。年齢的には後輩でもレースの世界では先輩である彼女は、まさに範とするに足りる存在だった。

「あ、ところでジエンティルさん」

「はい」

「時間は大丈夫ですか？ ついいろいろと話をしてしまいましたか」

「問題ございませんわ」

早起きは三文の徳、そのことわざを実感しつつ身支度を始めた。髪と尻尾のセットはブエナビスタさんが手伝ってくれた。

「おはようございます」

「おはようございます、ヴィルシーナさん」

寮の玄関に行くと、すでにヴィルシーナさんが待っていた。その横には私のトレーナーも来ていた。

「おはよージェンテイル、あれ？ ポンデリングは？」

「ポンデリング？」

なぜ突然もちもちとしたドーナツの話が出てくるのか訝^{いぶか}しんでいたら、ヴィルシーナさんが耳打ちしてくれた。

「ジェンテイルさんの普段の髪型のことだと思えます」

そう言えば今回はブエナビスタさんの勧め^{すす}に従って、髪をいつも通りに編むのではな

く、バレッタで軽くまとめしてみたのだった。

「なるほど。ありがとうございます」

トレーナーの方を見遣^みつて返事をした。

「『ボン・デ・リング』は道中で買いましたよ」

「すみませんでした！ ……あれ、怒ってない？」

「確かに普段の髪型がそのようだと思っただけで、別に腹を立てる理由はありませんが、
擲^や擲^ゆしたわけではないのでしょうか？」

「そりやもちろん！」

「ならばよろしい。あのドーナツのことは実は気に入ってしましてよ」

「そうなの、じゃあ買いましたよ……ふう、命拾いました」

「余計な一言は仰らないのが身のため世のため人のためですわ」

両手でトレーナーの頬をむにむにした。いかにも『ほつぺたが千切りとられる!』と言わんばかりの恐怖の表情が浮かんでいたのは見なかったことにした。私をなんだと思ってるのかしら。

少して都築トレーナー——ヴィルシーナさんのトレーナーさんも来たので学園を出発

し、最寄り駅から電車を乗り継いでまずは東京駅に着いた。駅の中は人が徐々に増えつつあり、新幹線ホームへの乗り換え改札口は大渋滞を起こしていた。

「うわ、やつぱり混んでんなあ〜……。これから乗るのぞみも空席が×マークでしょ、ギッチギチでことじゃんね」

「先輩、みんなグリーン車に変えちゃいます？ 自腹で」

「全員まとめて学業学務遠征扱いにしちゃったから無理無理。へんなことやったら梓あずさにボコボコにされるからやだ」

「あー、梓ちゃん……」

トレーナーは事務職員の方らしき名前を口にして身を震わせ始めた。しばらく戻ってきたそうにはない。顔の前で手を振っても反応がないので、無理やり改札口の方に押して行った。その様子を見たヴィルシーナさんが困惑しつつ小さく拳手をして質問した。

「その、梓さんと言う方はどんな方なんですか？」

「梓ちゃんは私の大学時代の同期で、今は学園の総務部でトレーナー業務関係の事務を握ってるわ。ほら、一昨日ヴィルシーナがいる時に部屋に来た一見優しそうなほんわか雰囲気の人」

「あの方が……」

都築トレーナーとヴィルシーナさんの話に置いて行かれかけ、その困惑が表情に出てしまっていたのか、都築トレーナーがその方の写真を見せてくれた。

「この子が梓ちゃん。運動神経がいいからトレーナーになるかと思つたら事務部門に就職決めちゃつて」

「ふむ……」

三人でその写真を見てみると、別の世界から帰還した私のトレーナーが首を突っ込んでまくし立ててきた。

「この子さ、楓には優しいのに私相手には超笑顔で超詰めてくんの。昨日なんか『藍先輩、書類のサインが二・五度傾いていますよ?』つて笑顔で訳分かんないこと言いながらグイグイ物理的に押しくらまんじゅうしてくるしさあ……。二・五度つて何だよ二・五度つて。サインに因縁つけてくるんだから、へんな手続をやつたつて知られたらたぶん物理的に吊るされてピシバシ叩かれる」

直感で悟つた。その梓さんという方はある種私の同類であるかもしれない。都築トレーナーも察するものがあつたらしく、こちらと目が合つた瞬間にサインが送られてきた。：

：『深入りは避けましょう』と。ちなみにヴィルシーナさんはキョトンとしていた。そうこうしているうちに改札口の前の列がじりじりと進み、ようやく改札を通過することができた。発車時刻が近付いてきているのでひとまずホームへ。

「えーっと、十九番ホームは……」

「先輩、真つ直ぐ行つた先みたいですよ」

「サンキュー楓！ お茶と何か適当に買って乗ろっか。待つてろ京都！」

新幹線の席は普通車の二人掛けの方を二列取つてあり、前に私とヴィルシーナさん、後ろにトレーナー達が座つた。前後左右はビジネス客と外国からの観光客ふうの人で完全に埋まつていた。

「ジェンティルさんは新幹線に乗るのは初めてですか？」

「ええ。遠くへ移動する時はもっぱら飛行機か車を利用していますので」

「そうなんですね。私もはつきり記憶している限りでは初めてです。パパ……コホン、父が言うには幼い頃に何回か野球の試合を観るために乗つたことがあるつて言うんですけど、ほとんど覚えてなくて」

「小さい頃ですとそうかもしれません」

「そうですね。あ、車内販売でアイスを買ってもらったことは覚えてます。ヴィブロスが欲しがって、じゃあシュヴァルと私にもって一個ずつ買ってもらいました」

その光景を想像してとても微笑ましくなった。自分の姉弟間ではまず起きそうもない光景だった。

「今でも車内販売でアイスは買えるんでしょうか」

ヴィルシーナさんの疑問を受けて調べてみたら、今はもうそもそもグリーン車でしか車内販売をしていなくて、それ以外だと駅のホームに設置されているアイスクリームの自動販売機で買えるようだった。

「そうですか……」

「帰りはグリーン車にいたしましょう」

「大丈夫でしょうか？ 乗る前にジェンテイルさんのトレーナーさんが事務部の方に処されるかと恐れおののいていた気がします」

「トレーナーは身を挺して私達の出張規程違反の責任を負ってくださいると信じております」

そう述べた瞬間、後ろから両頬を挟まれた。そして普段より一段と低めの声が入ってきた。

「ジェンテイルさんや。もし帰りをグリーン車にするならそれは構わないからちゃんと知らせてね？ 学園の方できちんと精算処理しないと私が懲戒食らうから」

「心得ております」

手続きと公平公正が重視される場面で粗雑な真似をしてつまらぬ隙を作らない。家の方針に従った対外的活動を通して身につけた原則だった。

二時間十五分ほどで京都に着き、観光客の一団に交じって列車を降りた。京都駅もあらゆるところに人が満ちていて、そのままだと歩きにくいことこの上ない。ここはあの技を使うべき場面だった。

「ヴァイルシーナさん、こちらへ」

「？ はい」

「ヴァイルシーナさんに近くに来てもらい、そのままエスコートする形で歩き始めた。私達の存在に気付いた人々が少しずつ避けてくれた。もちろん、私達はまだデビュー前の身な

ので名前はほぼ知られていない。それでも自信を纏まとって歩けば自然と道が開く。

「おお……まるでモーゼみたい……」

「やっぱり二人揃うとオーラが違いますね」

後ろをついてくるトレーナー達から漏れてくる声に少し誇らしさを覚えつつ、手配していたハイヤーに乗り込んでまずは今夜の宿に向かい、荷物を下ろしてから京都レース場に向かった。

土曜日昼過ぎの京都レース場は少しずつ来場者が増え始めていた。とはいえ観客席の方はまださほど埋まっておらず、多くの人はレストランやフードコートに列を作っていた。私達もその一員だった。行ってみたい店舗を決める時に地図上のある店を指差したところ、全員から大変驚かれた。

「えっ!? ジェンテイルってどて煮食べるの!？」

「トレーナー。貴方は私を何だと思っているのかしら?」

「いやだつてお嬢せう様が? 庶民の食べ物のだて煮?? 食べたことあるの?」

「ええ。先日例の相談所に行った時に、たまたま遭遇したゴールドシップさんが鍋一杯の

どて煮をプレゼントとして置いて行ってしまいました。最初に味見をしたナイスネイチャさんが絶品だと勧めてくださいだったので頂きました」

「私がどて煮を食べることを聞いたトレーナーが、なぜかうんうんと大きく頷いた。

「そっかー。よし、じゃあ片手にレース予想の新聞を持つて、もう片方にオレンジジュースを持つて、あとは爪楊枝とペグシ——」

「先輩、ジェンテイルさんを週末レース場に住んでそうな人に仕立てるのはやめてください。ウマ娘でその格好をしても不自然じゃないのは、おそらく広報委員のあの子だけですから」

ヴィルシーナさんのトレーナーさんが語った格好を頭の中で思い浮かべ、自分の身につけてしてみた。……近付くのがはばかられる怪しいウマ娘が誕生した。そのような格好をしても不自然ではない広報委員の子とは誰だろうか。

一人騒いでいるトレーナーに向けて溜め息をついていると、横からヴィルシーナさんが袖をクイクイと引っ張ってきた。

「あの、どて煮つてどんな料理でしょうか……?」

「牛すじ肉とこんにゃくを味噌で煮込んだ料理ですわ。美味しさは保証します」

「それなら……」

ヴィルシーナさんの耳と尻尾の動き的に、どて煮に興味を持って頂けたようだった。

「よっしゃ。じゃあどて煮と、あとはここのかすうどんでも行つとく？」

「いいですね先輩」

「どうぞご随意に」

昼食を買い求めて、手近な場所で食べた。レース場ならではのグルメは大変美味しい。ヴィルシーナさんもどて煮やかすうどんがお気に召したようだった。

そういるうちに、午後のレースの案内と中継が始まった。今週のトウインクル・シリーズのレースは東京レース場とここ京都レース場で開かれていて、今日は京都の第十一レースが重賞、GⅡ・デイリー杯ジュニアステークスだった。その前、第六レースから第八レースはクラシック級・シニア級の一勝クラスのダート戦、第九・第十レースが芝のマイル戦と中距離戦、ラストの第十二レースは二勝クラスのダート戦となっている。

「お、午後のレースが始まったね。さて、よく見えるところに行くか」

今回の私達はレースに出走するわけではなく、トレーナー達が他に担当している子がそ

もそもいなくて、当然ながらレースに出る子がいるはずもないので、一般席からの観戦だった。

「ジェンテイルはレース場に来たことはある？」

「いえ。今回が初めてですわ」

「そつか。じゃあ走りができるだけ間近に感じられる前列で決まり」

トレーナーに連れられるままにスタンドから外に出て、ゴール位置から少し離れた場所に陣取った。第六レースから第八レース、第十二レースが行われるダートコースは芝コースの内側にあるので少々遠い。

「次は一八〇〇だからすぐそこからスタートね。もうスターティングゲートが用意されてる」

トレーナーの指差す先に、映像や学園のコースでいつも見ているのと同じ形のゲートが運び込まれていた。それからほどなくしてコースの最終点検が終わり、パドックからコースに次のレースに出走する選手達が入場してきた。総勢十五名、既に何戦か走っている子ばかりなので緊張感は適度な範囲に収まっているように見える。そして、二勝目に向けての闘志をひしひしと感じ、それを受けて自分の闘争心も高まるのを感じた。

ファンファーレが響き渡り、選手達がゲートイン。ほどなくしてゲートが開き、ウマ娘達が一斉に飛び出し、あつという間に第一コーナーを曲がって行った。

「やつぱり……間近で観るとすごいですね……」

ヴィルシーナさんがぼつりと漏らした感想に、静かに頷いた。ターフビジョンに映される続けるウマ娘達の表情が徐々に険しくなっていき、明らかにスタミナ切れを起こしている子の姿も見えた。第四コーナーまで来ると完全に置いていかれた子が出てきた。

「頑張れー！ー！ー！ あと一息だーっ！」

「ファイトーツ!!」

近くにいた一般の観客の方から力の限り叫ぶ声が聞こえてきた。私も走るウマ娘達から目が離せなくなり、そしてその視線の先で、先頭の子がゴールラインを突き抜けた。

無意識のうちに拍手していた。闘志を尽くしての真剣勝負はとても力強く、美しかった。

それから一旦屋外の観覧席に座り、トレーナーがスタンドの中の店との間を往復して買って帰ってくる食べ物や飲み物を味わいつつ観戦していたら、本日のメインレース・デ

イリー杯ジュニアステークスの時間になった。スタンドの観客の数はかなり増えていた。『京都レース場第十一レース、本日のメイン、GⅡ・デイリー杯ジュニアステークスに出走するウマ娘は十二名です。まもなく発走となります』

「ジェンティルの適性的に京都の芝一六〇〇を走る可能性は十分ありそうだから少し説明すると、スタート地点は第二コーナーあたりのポケット奥、五〇〇メートル走ったところから上り坂を経て外回り第三コーナー、そこから一気に下って第四コーナー、四〇〇メートルの直線を走ってゴールね」

トレーナーの解説を聞いているうちにゲートが開いた。ウマ娘達が一斉に飛び出して行く中、一番人気に支持されている芦毛あしげの子の出脚であしが鈍にぶかった。大丈夫なのかやきもきしている、第四コーナーを抜けてから外に出て、鋭い末脚で後方から一気に差し切つて勝利した。

「いやあ、十二番の子すごかったねえ。おつ、上り三八ホン三十三秒七！ ジュニア王者になれるかもなあ」

「そうですねえ。いいものを観ました」

トレーナー達もしみじみつよやと呟つぶやいていた。

最後の第十二レース、そしてウイニングライブの冒頭を観て京都レース場を後にした。

「いやあいいレースを観た！　そしてレース場グルメを一杯食った！　最高！」

「トレーナー、突然雄叫びを上げるなどはしたない」

「失礼失礼」

帰りはレース場から京都の市内まで電車で戻る。GIレースが開かれる時と比べると少なめではあるらしいけれども、電車はかなり混雑していた。観客らしき方々の会話の中に、明日の秋華賞に出走するウマ娘の名前が交じっているのが分かる。

「秋華賞一番人気は、オークスで同着優勝した子みみたいです」

スマートフォンでレース情報を確かめていたらしい都築トレーナーが、トウインクル・シリーズ専門メディアの特集記事を開いてみんなに見せてくれた。今年のオークスはGIでは初となる一着同着の事例が生まれ、榎^かの女王が二名誕生した。そのうち一番人気だった選手がティアアラ二冠を達成、今回は三冠^{うかが}を窺^{うかが}う情勢だった。

「前走のローズステークスは少し調子が良くなかったみたいだけど、今回のトレーニング

データやトレーナーのコメントだとしてもいい仕上がりたい」

ティアアラ三冠の候補ということで前々から折に触れて注目している選手ゆえ、明日は重点的に観察したい。その思いはヴィルシーナさんも同じに違いなかった。

夕食を摂る予定の店の予約時間まで少し余裕があるので、祇園ぎおんしじょう四条駅に着いたところでトレーナー達と一旦別れてヴィルシーナさんと少し散策することにした。秋の夕方となると神社仏閣の拝観時間を過ぎているところが多いので、二十四時間参拝できる八坂やさか神社を訪れた。

本殿前の列に並び、手を合わせた後でヴィルシーナさんに尋ねられた。

「ジェンテイルさんは何かお願いはされたんですか？」

「ええ。トレーナーやヴィルシーナさんとその妹さん方の健康を」

その言葉にヴィルシーナさんは大変驚いていた。

「えっ？ いえ、私や妹達の方まで健康祈願をして頂いたのはありがたいのですが、必勝祈願などはなさらないのかと……」

『『必勝』は願い事ではなく、宣言として伝えましたわ。数多くの勝利を全ての人の目に

焼き付けてみせるので、是非とも見ていてほしいと」

「……私も宣言してきます」

ヴィルシーナさんが身を翻ひるがえして本殿の方に戻り、また参拝し直した。熱心に祈る彼女からは強い闘志が湧き起こっているように感じられた。

その後トレーナー達と再合流して夕食を摂り、ホテルに帰投して休んだ。

☆ ☆ ☆

そして秋華賞当日。九時頃にヴィルシーナさんとともにホテルをチェックアウトする際に荷物一式を京都駅まで配送してもらおう手続をして、電車で京都レース場へ向かった。レース場最寄りの淀駅ではかなり多くの人降り、そのほとんどがレース場に向かっていた。トレセン学園の制服を着たウマ娘も多く見かけた。

「やはり、昨日よりお客さんが多いですね。これがG I……」

「遠くから観ると、現地に実際に足を運ぶのとは、やはり感覚が違います」

非常に人が多いため、今日は予め全員分の指定席を取っている。席に行って腰を落ち着けたところでトレーナー達もやってきた。なぜか顔色がとても悪かった。

「おはよう諸君……今日は胃もたれ日和だぜ……」

「恥ずかしながら私も先輩に同じ……」

「トレーナーさん達どうしたんですか!？」

ヴィルシーナさんがバッグから急いで薬らしきものを取り出し、トレーナー達に渡した。薬の袋には胃薬と書かれていた。

「ありがとうヴィルシーナさん……」

「二人とも記憶しておいて、これがアラサーの現実よ……」

「はあ……」

しようもない方、という言葉が口から出かけて、これだと都築トレーナーにも突き刺さってしまうことに思い至った。自分のトレーナー相手には容赦しないが、他の方のトレーナーさんに対しては不躰ふじつけな言葉を投げつけてはならない。

「まだ薬が必要そうでしたら遠慮なく仰ってくださいね」

「おお、偉大なるお姉ちゃんよ……」

……二人揃って人目を^{はばか}憚らずヴィルシーナさんを崇拜し始めた姿を見て前言撤回したくなつたけれど、何とかこらえた。自分のトレーナーの方は床から引き剥がして椅子に押し込んだ。

完全に撃沈してしまっているトレーナー達は秋華賞まで休ませておき、ヴィルシーナさんと二人でレースを観戦した。今日は第三レースと第四レースがメイクデビュー戦で、ダートと芝が各一レースになっていた。メイクデビューだとほとんどの選手がぎこちなく、秋華賞のためにスタンドに詰めかけている観客の多さに^{けお}気圧されてしまっているのが見てとれた。

「やつぱり、GIの日のメイクデビューだとプレッシャーは大きそうですね」

「ええ」

自分だとうだろうか。ビジネスの場における^{ちようちちうはつし}丁々発止のやり取りや^{けんぼうじゆつすう}権謀術数には良くも悪くも慣れてしまつたけれど、昨日感じたような闘志を抱いた状態でこの熱気を受け取つた時、冷静にレース運びができるかはまだ分からない。勝利を万全のものとするためにも、緊張を適度な範囲に抑えられるよう訓練していくべきだと思つた。

そして十五時過ぎ、秋華賞パドック紹介の案内放送がかかったのでパドックの方へ行つた。観客が多数いたものの、良い感じに見渡せる位置を取ることができた。

『京都レース場第十一レース、クラシック級ティアラ路線の最終戦、第十五回秋華賞がまもなく出走となります。京都レース場の現在の天候は晴れ、バ場状態は良と発表されます。最後の一冠は誰の手に渡るのか。七年前のステイルインラブ以来のティアアラ三冠達成が成るか、非常に気になるところです。出走選手十八名の紹介に移ります』

会場の内外で見聞きしていた通り、そしてアナウンスでも流れた通り、やはり観客の関心はティアアラ三冠達成に集まっていた。その選手番号十五番の子は悠然とした佇まいでパドックでの挨拶をしていた。

パドックから指定席に戻ると、先ほどパドックにいた選手達がコースに出てきた。芝二〇〇メートルのレースはゲートがスタンド真正面に置かれる。発走役が登壇して赤い旗を掲げて左右に振り、ファンファーレの演奏が始まった。音楽に合わせた手拍子、そして演奏後の歓声に、まだ選手ではないのに心が沸くのを感じた。

ゲート入りが行われ、注目の十五番の選手が若干遅れたものの概ねスムーズに進み、ス

スタートが切られた。三番人氣を背負った五番の選手が若干出遅れた他はスムーズなスタートだった。九番の子が前走数戦と同様に先頭を奪取して大逃げを打ち、どんどん先へ進んで行つた。速度が緩まず流れる中、注目の十五番の選手は中団を進んでいた。

第四コーナーから十五番の選手は外に進路を取って一気にスパートを掛け、全員を抜き去つて二着の子にきつちり差をつけて先頭でゴール板を駆け抜けた。

その瞬間、場内が沸き立つた。その子の名前が連呼され、偉業が伝えられた。

『——史上三人目のトリプルティアラ達成!』
爆発的な歓声と拍手、そしてコールに心が震えた。

勝者インタビューが場内に流れ、再び歓声が沸き起こつた後に、まわりにいた三名に向けて宣言した。

「……二年後、あの地に、あのウイナーズサークルに立ちます」

私の宣言への同意は予想通り一名、異議も予想通り二名だった。

「ええ。目指すよ、三冠」

「いいえ。勝つのは私です」

「その通り。ヴィルシーナが勝つわ」

先日によく、二度目の宣戦布告。今度は彼女の手を取り、握手して告げた。

「その言葉、確かに受け取りました。共にトレーニングを進めてまいりましょう」

「ええ、よろしくお願いいたします」

☆ ☆ ☆

ウイニングライブを観た後に京都駅へ移動し、ホテルから送られていた荷物を受け取って、さらにブエナビスタさんへのお土産を調達してから帰りの新幹線に乗り込んだ。ヴィルシーナさんも同様にお土産を買い込んでいて、その量は両手一杯の紙袋として現れていた。

「それほど量の土産をどなたに？」

「はい。これはシュヴァルの分、こちらはヴィブロス、これがパパ……コホン、父宛て

で、こちらがママ……じゃなかった母へのお土産です。そしてこれが同室のホッコータル
マエさん向け」

「妹さん方にもそれぞれ大きな箱を一つずつとは、ずいぶんと大盤振る舞いなお土産です
わね……」

「はい。でもシュヴァルはこの量をあつという間に食べちゃうんです。最近はお食なヴィ
ブロスから半分譲ってもらっているのだとか」

「随分な健康家けんたんかでいらつしやるのね。シュヴァルグランさんは」

最初に彼女達を見かけた時に、クッキーをもくもくと食べている様子からはあまり大食
いであるようには見えなかったけれど、一定のペースでひたすら食べ続けているうちにた
くさん食べてしまう類の食べ方なのだろう。

帰りの新幹線の席は行きがけの提案通りグリーン車にした。トレーナー達は普通車を選
んだ。せっかくなのでヴィルシーナさんの勧めに従ってアイスクリームを買い求め、早速
スプーンを入れようとしたところ、すぐにはね返された。ヴィルシーナさんも同様にはね
返されていた。

「やっぱり今でもカチカチに固いんですね。このアイス」

「……そのようで」

下手に力を入れると、アイスを掬う前にスプーンが折れるか、座席のテーブルが壊れるかしかねないのでしばらく待った。その間にヴィルシーナさんが妹さん方に写真つきでメッセージを送っていたらしく、そのやり取りを見せてくれた。

ヴィルシーナ「新幹線の中でアイスを買いました」

ヴィブロス『あ！ シンカンセンスゴイカタイアイス！』

ヴィルシーナ「シンカンセンスゴクカタイアイス？ ずいぶん長い名前がついているのね」

ヴィブロス『ちがう！ シンカンセンスゴ『イ』カタイアイス!!』

ヴィルシーナ「……そこに違いはあるのかしら」

ヴィブロス『あるよ!』

「微笑ましいメッセージですわね」

「ええ。いつも元気をくれる妹達です。……あ、でもシュヴァルからの返事がないわ……」

笑顔になったかと思っただらいきなり表情が曇った。このままだとあと数十秒で泣き出しそうなところまで感情が急降下していて、その時にどう慰めたものか隣でやきもきしていたら、ぴよこんとスタンプが現れた。焼き芋を美味しそうに食べているハムスターのスタンプだった。

「あらあら……シュヴァルったらスタンプでも食いしん坊さんね」

「ふふっ」

ヴィルシーナさんはとことん姉だなと思わせる一幕だった。

ちなみにアイスクリームは十分ほど経ったら適度な固さになり、今度はきちんとスプーンが通った。アイスは一流の美味しきで、せつかくならこれもブエナビスタさんに贈ろうと思ったものの、ここで買って持ち帰っても溶けてしまいそうだった。

寮に帰り着いて軽く自主トレーニングをした後、大浴場の体重計に乗ったところ、驚きの数字を目にしてしまった。

「不覚……」

翌日、練習コースで準備をしていると、悲壮な表情を浮かべたヴィルシーナさんがやって来た。

「こんにちはヴィルシーナさん。顔色がすぐれないようですが」

「……ジェンティルさん、体重測りました？ 何キロでした……？」

「青空の下で大つぶらに話す事柄ではないと思われませんが」

昨夜の測定結果を耳打ちすると、ヴィルシーナさんの表情が途端に明るくなり、満面の笑みを浮かべて握手を求めてきた。

「ともに頑張りましょう！」

「……ええ」

休み明けのトレーニングをヴィルシーナさんと一緒にできる嬉しさが半分、その中身が体重調整というアスリートにあるまじき事態という情けなさ半分の心を抱えてトレーニン

グメニユーをこなした。

しばらくして遅れてやってきたトレーナー達が珍しくジャージ姿だった。しかも妙に念入りにストレッチをしている。ひとつ思い至ったことがあったので、劳いの言葉をか
けた。

「……まずは全員で減量活動を進めてまいりましょう」

「「はい……」」

間章 休憩所にて

(鹿島トレーナー&都築トレーナー)

トレーナー室からジェンテイルが出て行った後、背伸びをしてから額とお腹をさすつた。最近物理的にバイオレンスな攻撃を受けまくっているの、身体に風穴が空く前にマッスルアーマーを装備しなければ、と先日貰った重さ二十キロの鉄球を眺めた。……持ち上げにくいのでせめてダンベルにしてほしい。

気分転換のために散歩に出て事務部棟の自動販売機コーナーまで行くと、ほどなくして楓——ヴィルシーナさんを担当している後輩トレーナーも来た。

「先輩、お疲れ様です」

「お疲れ。先週はありがとね、うちのお姫ひめいサマのバカみたいなの併走に付き合ってくれ。あとは京都遠征も」

「いえ。あれほどに強い子と併走できるのはヴィルシーナのためにもなりますし。私もかなり勉強になりました」

「それは良かった」

一息入れ、併走について率そつちよく直な感想を口にした。

「ヴィルシーナちゃんつてかなりポテンシャルあるね。中等部であのジェンテイルに肉薄にくぼくできる子はいないんじゃない？」

それに対する返事はかすかな、そして自信に満ちた笑みだった。

「そうですね。今のところはいいと思います。このまま成長できればクラシック級での三冠も夢じゃないと考えています。クラシック三冠を選ぶか、ティアアラ三冠を選ぶかは本人の意思次第ですが、どちらを選んでも狙えそうです。一応今の方針は、併走や京都遠征の時に本人が言った通りティアアラ路線です。昨日二人で話をして正式に決めました」

「三冠達成ねえ。ヴィルシーナさんのこと結構高く買っつてんじゃない。私もそう思うけど」

お互いに軽く笑った。あの蒼の子は非常に強くなる素質がある。楓の言う通り、三冠を獲るのも夢じゃない。……同期に化け物級のウマ娘がない限りは。

「先輩、その言葉には続きがありますよね。『私の教え子のジェンテイルが勝つ』って」

「……まあね。ジェンテイルはやっぱ別格。教え子という鼻^{ひいきめ}眞目を抜きにしても、デビュー時期を遅らせた副産物で異常なパワーがある特殊事情を抜きにしても、根っこが強い」

「ここまで強いライバルが同期になりそうだと、勝利のしがいがありますね」

「お互い様。他にも素質がある子はいっぱいいるし、トレーニング計画はじっくり練らないとね」

「ですね」

「さて、と。……ところで『お嬢様』」

私の声掛けは、『お嬢様』が私の唇に当てた人差し指によって遮られた。

「……ここではただの後輩ですよ、『藍さん』。普段のやり取りが九割九分カジュアルなのに、妙なタイミングで畏^{かし}まると、いずれボロが出て彼女達が変に思いますよ」

「しかしお嬢様、折に触れて立場を振り返ることは——」

「取っ組み合いの喧嘩になった時に私を容赦なく言葉でも拳でもボコボコにしているのに、誰に対して何を取り纏うの？ 前々から言っているけれど、家の行事の時以外『お嬢様』と呼ぶの禁止。これは命令です」

少しだけ沈黙して、私は両手を挙げた。

「……ふふつ、やっぱりお嬢様——楓には敵わないな」

「先輩が先日トレーナー室で叫んだ時に『お嬢様』と口走ったり、お金を出し合うと言った時に私が百パーセント出すかのような発言をしたせいで、ジェンティルドンナさんは私の素性すじょうをある程度察してしまわれたようです。普段隠していることが明るみになったこの責任は取ってもらわないといけませんね」

にこやかに私の罪を告げられた。付き人として、また、先輩として述べられる言葉はひとつだけだった。

「……なんなりと」

「私がとことん先輩に奢おごります。するとあら不思議、主あるじが優秀な付き人にプレゼントをしているだけなのに、なぜか後輩に金を出させているダメ先輩にしか見えない構図が

爆誕！」

「地味になけなしのプライドを殲滅するのはやめてくんない？ いえやめてくださいお願いします何でもしますから！」

「この学園で『何でもする』って言っちゃうと、今度あるトレセン学園全国うどんフェア実行委員会の実行委員業務が上乘せされちゃいますよ？」

「これ以上の会議はやめてくれ！ あのちみつこ理事長をなんで今回は止めてくれなかったんだたづなさんは！」

「今回は白江トレーナーが暴走しちゃいましたからねえ」

「うーむ……」

そこまで気張った主従関係ではなくて、いろいろとお世話したりされたり、尊敬したりされたりといったごく普通の関係性ではあるけれど、ここぞという時にお嬢様を見せてくれる強さを特に尊敬していて、彼女のためならばどこまでもお供しようと思っている。

とはいえ、事あるごとに学園のウマ娘をストーキングして各所から怒られ、その尻拭いしりぬぐめいたことをさせられるのは勘弁願いたい。それでも願ひ事は叶えてあげたいので、ヴィ

ルシーナさんとお嬢様をくつつける作戦を実行したりもした。主な苦勞はお嬢様とジェンテイルに対して出されていた接近禁止令をすり抜けるために理事たづな長秘書なから言質を取るところだった。幸いにして無事くつつけられたので安心している。

「さ、先輩、仕事に戻りますよ」

「うえー……」

「『藍さん、仕事ですよ』」

「いえつさー!!」

(『蒼と紅』第六章に続く)

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦（穀物P）と申します。

当作品は、ちょうど一年と少し前の二〇二四年九月から書いているジェンテイルドンナさん&ヴィルシーナさんのカップリング（ジェンヴィル）で書いている連作的作品『蒼と紅』を本の形にしてみました。冒頭的大幅加筆をしつつ再編したものの第二巻となります。

Q. ジェンテイルさんとシーナさんってうっかり食べ過ぎて太るっけ？

A. 愛ゆえに。

昨年十一月、実馬のジェンティルドンナさんの突然の訃報に大変驚きました。このシリーズの執筆もかねて日々競馬関係のデータベースを漁っていましたが、直近数年ずっと流産や不受胎が続いているヴィルシーナさんの健康状態の方が気掛かりだったので、予想だにしない方向からの悲報にしばらく安心してしまいました。昨年初頭から体調を崩していたとのことで、思えば五月に用途変更（繁殖牝馬引退）、七月に繁殖引退発表というわりと急な動きではあったのですが、馬の生産の方の事情には疎かったので特に疑問にも思っていないませんでした。

最近では長寿のお馬さんも多くなり、ウマ娘組ではメジロドーベルさんが三十二歳にして年齢を感じさせない活発な姿が紹介されていて、ツルマルツヨシさんも三十一歳で健在、ハルウララさんは昨年九月に二十九歳で亡くなる直前まで普通に食事を摂る元気さを見せていました。そうした中では十六歳での死は大変早いものでした。同じレースを走った同期の中では、ジョワードヴィーヴルさん（半姉にブエナビスタさん）が四歳時に調教中の故障で予後不良（安楽死の措置）となり、一昨年にハナズゴールさんも亡くなるなど早世したお馬さんもありますが、多くのお馬さんは健在であるだけに寂しさを覚えます。繁殖引退発表を聞いた時に、いずれ見学可能になる日が来るのではと少し期待していましたが、永

久に叶わなくなっていました。

ウマ娘内でもシリーズ物複数、別ジャンルでも並行執筆するなど多正面作戦の様相を呈しておりますが、順次書き進めますので引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

麦（穀物P）

蒼と紅 2

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二六年（令和八年）二月二十三日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)